

「もう二度と起こしてはならない！安倍元総理銃撃事件の現場の警備体制について実体験をもとに私見を述べます」

令和4年7月12日

●塾講師 A さんからの質問

西田先生、こんばんは。まずは、京都で吉井さんの当選、そして、どうやら維新の触手を防げたことは、大変よかったですと思います。選対本部長として、本当に大変だったと思います。とりわけ、最終盤であんなことになって、ご心情としては選挙どころではなかったと思います。それでも、最後まで責任を果たされた西田先生のことを、改めて尊敬致します。思い返せば、今から20年くらい前、当時勤めていた学習塾の教え子に、ご両親が警察官という生徒がいました。普段面接にいらっしゃるお母様は所轄書の刑事さんでしたが、お父様は小泉首相のSPをされていました。1回だけお父様とお話をする機会がありましたが、雑談の中で、SPの仕事について、お話を伺ったことがありました。「前方よりも後方」「いざとなれば覆い被さる」「どうせ防弾チョッキを着ているんだから、頭に当たらなければどうにかなると思えば何でもできる」というようなお話が思い出されます。それに対して、今回の警備がどうであったか。私は、どうしても安倍総理が撃たれた映像が見られません。そういう映像が出ていることは把握していますが、見る気になりません。ただ、その直前の写真を見る限り、後ろの方を見ている警備の方がおられません。質問文になりませんが、どうしても、「背景の徹底的な捜査」と「要人警護のあり方」については、よくよく考えなければならないと思います。

●西田昌司の答え

私もこれまでに（安倍元総理が暗殺された）西大寺駅で演説をしたことがあります。安倍元総理が銃撃されたあの場所ではありませんでした。あの

場所は（どの方向からも撃つことのできる）絶対に演説をしてはいけない場所です。

安倍元総理は（銃撃された）奈良の後にすぐさま京都に来られる予定でしたし、我々はその旨の新聞広告を出して動員を呼びかけていましたが、京都では当然のことながら街宣車の上で行うことになっていました。安倍元総理が撃たれたことからわかるように、道路に立って演説をするのは極めて危険なのです。

道路に立てばナイフ等で刺される危険がありますし、そのためには距離を離さなければなりません。私は、国会議員になる前は京都府議会議員を務めていましたが、その頃は毎日のように街頭演説をしていました。当初、街宣車も持っていませんでしたので、車に積んだ携帯マイクを使って、道路に立って話していましたが、何度も危ない状況がありました。

私に絡んでくる人、石を投げる人、トラックで寄せてきて轢いてやろうと言わんばかりの嫌がらせをする人といった具合に、いろいろな人に出くわしました。そんなことをしていると命がもたないとの身の危険を感じた私は、街宣車を買ってその上で演説をするスタイルに変更しました。（街宣車の上から演説をすると上から目線になってしまうので）道路に立って聴衆との距離を近づけるスタイルを好む議員もいますが、それはやってはいけないのです。

安倍元総理の銃撃の報に接して真っ先に思ったのは、何故あのような無防備な場所に立たせたのかということです。どうしてもあの場所でということであれば、安倍元総理の周りを5、6人のSPが取り囲むくらいのことをしてなければ危なくて仕方がないと、今となっては誰しも思うでしょう。

ある新聞記者が私に話したことですが、今回の事件は「自分の国は自分で守る」という気概を持たない戦後日本人のメンタリティーが招いたのかもしれません。多くの日本人は「自分が仕掛けられない限り、相手は何もしてこな

い」というお花畑の思考に染まっていますが、世の中には頭のおかしい人がたくさんいますし、常識の通用しない人や国を相手に生きていかなければならないのです。

奈良県警は、安倍元総理のようなVIPを守るためには、山上容疑者が行ったような襲撃を想定した警護体制を計画する必要があったはずですが、そのような緊迫感に大いに欠けていたと思います。もう二度と今回のような事件が起こることのないように、警護を一から見直さなければなりません。

安倍元総理のご冥福をお祈りいたします。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>